不安定キッス

栞

不安定キッス

　喉の奥から妙な空気が込み上げてくるのに、睫毛の間をすり抜けてゆくものは何だろう。声を搾り出そうにも気管に詰まってしまって、言葉にならない感情がうすい唇を濡らす。
　時折一人を追いかけたくなるこの感覚は、何。その裏腹に隠れている、きたない寂しがりやな心。

　手を繋ぐ相手がいる。手を繋ぎたい相手がいる。存在が当たり前になってゆく、それに気づいた瞬間に肝がひやりとする。当たり前が崩壊する瞬間を頭にかすめては、残酷な自分のうちにある像がくつくつと笑い声を上げるのだ。いつまで縋っていられるだろうか、と。

　雨に濡れた肩を休めるように、不安定を欲する瞬間。いつ来るのかもわからぬ別れに恐怖しては、いらぬ覚悟を持って相手に踵を向けようとする。繋ぎとめて欲しいと、繋ぎとめてくれると、ほのりと期待を残しておいて。腕を掴まれる瞬間に来る安堵はおそらく、自堕落に似た甘いあまい子供の精神。平衡感覚をぐらりとなくしたところで、きみが必要だ、と意識を取り戻して満足を得る。汗ばんだ手のひらに恋人の頬を包めば、その笑顔に恍惚し、その心配げな顔に優位に立とうとする劣悪でうつくしい自己愛。

　安定ばかりでは、不安定。
　不安定ばかりでは安定を求めてしまう、秋の空。

　君に対する優しさは自分に対する優しさ。君に対する嫌悪感も自分に対する優しさ。
　唇を重ねては足許が覚束なくなり、ふらつく地球の中心でしあわせを探しつづける。